

## 特許調査を支援するパテントファインダーの提案 —シャープペンシルを例として—

中村千咲

技術開発において継続した特許調査は不可欠となっている。さらに知的財産部門の人だけでなく研究開発部門の人にも特許調査が求められるようになってきている。しかし特許調査をおこなうためには、特許調査における専門知識が必要となる。特許検索の知識を有していない場合、その検索が原因となり様々な問題が生じる可能性があり、特許検索を支援するツールがあれば問題発生を避けることができると考えられる。

本研究は、特許検索をおこなうことに不慣れな人の検索を支援することを目的とし、今までの技術動向と、最新の特許を検索するために必要な検索知識を合わせて提供する方法を提案する。技術分野としてシャープペンシルを例として取り上げ、本研究では日本特許を対象とした特許検索支援ツールを提案する。

はじめにシャープペンシルの技術内容をあらわす特許分類の IPC、FI および F タームの調査をおこない、技術要素を抽出した。また、それぞれの特許分類の改訂について詳しく調査した結果、最近 20 年間には大きな改訂がないことを確認した。FI および F タームについては、IPC よりも細かい分類が定義されており、技術内容を細かく指定した検索が可能であることがわかった。さらに、これらの分類記号と技術内容との対応付けをおこない、技術の観点を手がかりとして、技術内容を指定した検索をおこなう際に使用できる分類記号および言葉を探すことができるようにした。検索システムについては IPDL および Esp@cenet を取り上げ、検索システムごとに、使用可能な検索語および検索対象とすることができる特許公報の種類について特徴をまとめた。これにより検索者は、検索目的に合わせて、検索システムとデータベースを選択することが可能となった。また、シャープペンシルの特許出願に関して、今までの技術動向を提供するために、出願年、技術要素、出願件数、出願人から特許分析をおこない、分析結果をグラフとして示した。

シャープペンシルの特許に関する検索語および検索場所の調査結果と特許の分析結果をふまえて、特許検索支援ツールの設計をおこなった。本研究では、今までの技術動向を視覚的に提供するという「パテントマップ」の特徴と、最新の特許を検索するための支援をおこなう「パスファインダー」の特徴を合わせもつ、特許検索支援ツールを提案し、これを「パテントファインダー」と呼ぶことにした。

パテントファインダーでは、技術動向をグラフで示したため、出願件数の技術要素別の変化や出願人ごとの特徴を把握することが容易となった。また特許検索方法としては、技術の観点から検索語として使用可能な特許分類および言葉についても知ることができるため、モレのない検索やノイズの少ない検索が簡単にできるようになった。さらに検索場所と具体的な検索方法についても示すことにより、同様の検索が可能となり、最新の特許についての検索がおこなえるようになった。したがって本研究が提案したパテントファインダーは、特許の検索知識の乏しい利用者の特許調査を支援できると考える。

(指導教員 岩澤まり子)